

# 「失われた世代」の作家たち

## ーフィッツジェラルドとヘミングウェイの絆ー

宮内 華代子

### 1 「失われた世代」とは何か

アーネスト・ヘミングウェイ(1899-1961)の長編小説『日はまた昇る』は1926年10月に出版されると、非常な反響を呼び、初版はわずか5090部であったのが、一年間で二万六千部を売り尽くした。ヘミングウェイを一躍有名作家にしたこの本の巻頭見開きに題辞として、パリ在住のアメリカ人作家ガートルード・スタイン(1874-1946)の言葉、「あなたたちは、みんな、失われた世代なのよ。(You are all a lost generation.)」が付されていた。以来、「失われた世代」は流行語となった。

この長編は、第一次世界大戦で負傷して性的不能者となった新聞記者のジェイク・バーンズ、レディの称号を持ち酒と男の遍歴を重ねているブレット・アシュレー、ユダヤ人作家ロバート・コーンら、国籍喪失者たちのフランスとスペインに跨る生活を描き出していた。主としてこの本の内容から、「失われた世代」とは、1890年代の中頃から終わりに生まれ、第一次世界大戦に際して入隊し、戦後の社会的混乱の中で、精神的荒廃と幻滅を味わい、人生の目標を見失って放浪し、国籍喪失者(同然)の生活を送った彷徨える若者たちをさす言葉として解釈された。彼らは第一次世界大戦後から1920年代末頃までの間に主にパリに集まり、ガートルード・スタインの文学サロンと、シルヴィア・ビーチが経営する貸本屋シェイクスピア書店に出入りして芸術的社交生活を味わった。パリで起こったジーン・コクトー、パブロ・ピカソらの前衛的芸術運動やヨーロッパに広がっていたダダイズム運動に多くのものを学びながら、それぞれの自己の文学を築き上げた。多くは20年代半ばごろには名声を得、それまで文体や小説法上、ヨーロッパを模倣するところの多かったアメリカ文学を、独立した文学へと高めるのに貢献したのである。従って、『超現実主義者との生活』(1962)を著したマッシュュー・ジョーゼフソンのように、アメリカ文学史上定着してしまった上記の「失われた世代」の定義に異論を唱える者が出てくるのは当然であろう。ジョーゼフソンは、この世代を「失われた」と呼ぶのは誤りであるとした。彼らの文学と生活を「荒廃」「虚無」「頹廢」「喪失」といった否定的観念と結びつけて「失われた」と呼ぶのは間違っていて、彼らこそ、新しい文学・芸術運動から多くを吸収して、アメリカにも同様の芸術気運をもたらそうとした新興文学の開拓者であると述べている<sup>1)</sup>。

### 2 「失われた世代の」の起源

ヘミングウェイの死後、若き日のパリ修業時代の回想記『移動祝祭日』(1964)が発行され、その中で「失われた世代」という言葉を流行らせた作者が自らその由来を明らかにした。「失われた世代」と題した章の中での記述は次の通りであった。ある日、ガートルード・スタインが自動車修理工場に車を出しに行った。その修理工場で、大戦中に入隊した経験を持つ職工が働いていたが、不

真面目な仕事ぶりだったので、工場主がひどく叱って、「おまえらは、みんな、失われた世代 (génération perdue) じゃないか。」と罵った。後に、スタインのアパートを訪れたヘミングウェイにスタインがその言葉を伝え、前述の通り、ヘミングウェイが『日はまた昇る』の扉にその言葉を用いたのだった。以上のような記述から判断すれば、後に世間に広く知られることになった文学要語「失われた世代」は、元々は、「仕事に精を出さずに飲んだくれてるどうしようもない若僧ら」という程度の軽い意味で使われたことになる。スタインから「失われた世代」と呼ばれた日の晩、彼女のアパートからの帰り道、ヘミングウェイは次のように思った。「ミス・スタインや、シャーウッド・アンダスンや、自己中心癖や、精神的怠惰対修練といったことを考え、いったい誰が誰を失われた世代などと呼んでいるのか、と疑問に思った…あらゆる世代は何かによって失われた。今まででもずっとそうだったし、これからでもずっとそうだろう、と私は考えた…彼女の失われた世代の話や、汚らしい安易なレッテルはまっぴらごめんだ<sup>2)</sup>。」

「失われた」とみなすか否か、またこの言葉に仰々しい解釈が加えられたことが、長編の巻頭にこの言葉を掲げたヘミングウェイの意図した通りであったか否かは別にして、1920～30年代にかけて世界的に通用する作家を輩出した特殊な文学世代が存在したことは確かである。文学史上、「失われた世代」に属する作家とみなされてきたのは、アーキボールド・マクリーシュ、e.e. カミングズ、エドマンド・ウィルソン、F・スコット・フィッツジェラルド、ジョン・ドス・パソス、ルイス・プロムフィールド、ウィリアム・フォークナー、マルカム・カウリー、アーネスト・ヘミングウェイたちである。

彼らの中でも、フィッツジェラルド(1896-1940)とヘミングウェイの長い年月に及ぶ交際はよく知られており、特に20年代、30年代のアメリカ文壇の話題となることも多かった。二人は、1925年4月下旬にパリのドラブル街にあるデインゴ酒場で出会った。フィッツジェラルドが28歳、ヘミングウェイが25歳の時である。以来、二人の個人的な繋がり、1940年にフィッツジェラルドが急逝するまで、時に深い友情で結ばれ、時に反目し合い、時に破綻しかけながら、また時には見かけ上だけでも、とにかく15年間もの長期にわたって続いた。本稿では以降、主としてフィッツジェラルドとヘミングウェイが創作上互いに与えた影響を明らかにし、二人がどのような絆で結ばれていたかを検討する。それにより、「失われた世代」の作家たちの中でも、いち早く戦後の文壇に登場して活躍したために、「失われた世代」の旗手と呼ばれるフィッツジェラルドと、アメリカ文学を世界的に通用する高い水準に引き上げるのに最も貢献したノーベル賞作家であるこの世代の代表選手、ヘミングウェイの二人の作家の人物像を一層的確に捉え、二人の作品を一層深く理解する手がかりを得たい。

### 3 邂逅

既に述べた通り、フィッツジェラルドとヘミングウェイは1925年にパリの酒場で初めて出会った。だが、正確には二人の個人的な関係はその時に始まったのではない。その7か月も前に、フィッツジェラルドはアメリカ最大手の出版社、スクリブナーズ・サンズ社の編集者マックスウェル・パーキンズ宛に、ヘミングウェイを推薦する手紙を送っていた。「パリ在住のアメリカ人で、ヘミングウェイという名の青年についてお知らせするためにこの手紙を書きました…彼は前途有望で、本物です<sup>3)</sup>。」と

述べていることは、フィッツジェラルドの眼力の確かさを示している。その後も、フィッツジェラルドはパーキンズにヘミングウェイと出版契約を結ぶように促し続け、ヘミングウェイ売り込みが成功して、スクリブナーズ社から1926年5月に『春の奔流』が出版された。それ以後もヘミングウェイの作品をスクリブナーズ社から出すことにパーキンズが決定したのは、パーキンズがヘミングウェイの将来性を確信したからだけでなく、ヘミングウェイの作家としてすぐれた資質を見抜くことができるフィッツジェラルドの直感力をも信頼していたからだった<sup>4)</sup>。

フィッツジェラルドとヘミングウェイが初めて出会った時、フィッツジェラルドは3冊目の長編『偉大なギャツビー』(1925)を出版してまもなくの頃で、約20年間にわたる作家活動の絶頂期にあり、『アメリカン・マガジン』誌に書かれた呼称を用いれば、『アメリカで最も有名な若手作家』でもあった<sup>5)</sup>。一方、ヘミングウェイは、それまでに時折、雑誌に詩や短篇を発表し、3冊の短篇集を出してはいたが、人々からまださほど注目されていない駆け出しの作家だった。ところがまもなく、1926年以降になると、フィッツジェラルドは収入は減る一方で病気がちになり、莫大な借金をかかえ、やがては短篇を乱造して食いつなぐような小説家となってしまう。ヘミングウェイは、『日はまた昇る』の成功に続いて、『武器よさらば』(1929)が発売以来半年間で七万九千部を売り尽くす売れ行きを見せ、華々しい活躍をして文壇でもてはやされるようになる。わずか数年後にはこのように立場が全く逆転してしまうとは、二人が出会った当初誰に予測できただろうか。

二人の交際が始まった当時、ヘミングウェイが最も必要としていたのは、大手出版社から作品を出版する機会を得ることであり、すでに作家として確固たる地位を築き上げていたフィッツジェラルドにとっては、自分が発掘したヘミングウェイを世に送り出す尽力をすることこそ、自らの多大な喜びだった。1925年か26年の夏に、小説家グレンウェイ・ウェスコットは、好意的な書評を書くなどしてヘミングウェイの後援をするように、フィッツジェラルドから依頼された。フィッツジェラルドが、ライバルとなる作家の出世を心から願って熱心に手助けしていることに、ウェスコットは驚き呆れ果てている<sup>6)</sup>。けれども、この類まれな人の良さこそ、フィッツジェラルドの魅力的な人柄を作り出していた大きな要素の一つであり、彼が多くの友人に恵まれた所以でもある。

#### 4 フィッツジェラルドからヘミングウェイへの助言

ヘミングウェイは『日はまた昇る』を1925年7月21日に書き始め、9月6日に初稿を完成し、11月末から推敲に4か月余をかけて1926年10月に出版した。フィッツジェラルドはニューヨークの印刷所で校正刷りが組まれている間にそのカーボン・コピーを読み、10頁にも及ぶ意見を書いてヘミングウェイに渡した。特に作品の冒頭から20頁までについては、殆んど一頁ごととりあげて批評し、一箇所ごとに細かな指示を与えて2500語を削るようにすすめた。さらに、主人公ジェイクの性的不能に対して、ブレットと本人が抱く気持ちを抑制を利かせすぎで十分に伝えられていないと批判した。フィッツジェラルドが誓めたのはたった一箇所だけで、フランシス・クラインが自分を捨てたロバート・コーンを罵倒する場面だった。ヘミングウェイはフィッツジェラルドの説得に従って、作品の初めの数章を削除することに同意した<sup>7)</sup>。

ヘミングウェイの次作の長編『武器よさらば』の原稿をフィッツジェラルドが読んだのは、すでに原稿がスクリブナーズ社に送られた後の1929年6月だった。今度もフィッツジェラルドは長文の助言を書いた。「114-121頁、退屈+削除必要…124頁及び以下、絶対つまらん。まるで恥さらし…130頁から『へばった(cooked)』が12回も出てきて、いらいらしてくる…(キャサリンの有名な台詞、『私、雨がこわいの、だって時々、自分が雨に打たれて死んでいるのが見えるから』及び、彼女の饒舌に言及して)全面的に削るか書き直すべきだ…」このような具合に、今回の助言は『日はまた昇る』の時よりも、一層強い調子で書かれていた。『日はまた昇る』のときと同様に、削除をすすめた箇所が多かったが、フィッツジェラルドが強い不満を持ったのは、未婚の母になろうとする健気な若い女性という、女主人公キャサリンの設定に対してだった。それは、これまでに多くの作家たちに使い古されたものであるという理由でフィッツジェラルドは反対した。

延々と50項目にも及んだフィッツジェラルドの今回の助言に、「くそくらえ! EH」と書き込んであったことから、ヘミングウェイはフィッツジェラルドの忠告を素直に聞き入れる気持になれなかったことがわかる。しかし、実際には、フィッツジェラルドの助言に従って、40章冒頭のフレデリック・ヘンリーの長い独白部分は削除され、作品の結末では、フィッツジェラルドとの議論の末に考え出された、本論6に後述する技法が用いられた<sup>8)</sup>。

## 5 ヘミングウェイからフィッツジェラルドへの助言

フィッツジェラルドとヘミングウェイが1925年4月に会ってから、フィッツジェラルドが亡くなるまでの15年間に、ヘミングウェイは5冊の長編小説と3冊の短篇集を出版した。フィッツジェラルドは2冊の短篇集の他には、長編小説は『夜はやさし』(1934)を一冊出しただけである。長編の原稿執筆がはかどらないフィッツジェラルドに、ヘミングウェイは二人の交際の最初から幾度も繰り返して、長編の原稿を書き続けるべきだと促した

1926年4月20日付のヘミングウェイの手紙には、『偉大なギャツビー』の印税とその映画化に伴って入ってくる収入で短篇を書かずにすむはずだから、長編小説を書くようにと、また勧めている。後の1954年にノーベル文学賞を得ることになるヘミングウェイが、この手紙の中で、フィッツジェラルドなら、まだアメリカの作家が獲得していないノーベル賞をとれるかもしれないと励ましの言葉まで添えているのは興味深い<sup>9)</sup>。1931年4月12日付のヘミングウェイの手紙では、追伸としてフィッツジェラルドの父親が心臓障害で亡くなったことに言及している。作家にとっては、親の死は貴重な体験であるから、『サタデー・イブニング・ポスト』誌に載せる短篇ではなく、ぜひ長編で父親の死を題材とするようにと、長編の執筆を勧めた<sup>10)</sup>。

ヘミングウェイに言われるまでもなく、フィッツジェラルド自身、長編作家であると自負し、長編の執筆に専念できる身分になりたいと望んでいた<sup>11)</sup>。それにもかかわらず、『偉大なギャツビー』から『夜はやさし』の出版まで8年も費やしてしまった第一の理由は、長編の執筆が短篇を書くためにあまりにしばしば中断されてしまったからである。彼はおよそ20年間の作家活動の中で、4冊の長編小説を出版し、一冊の長編の遺稿を残し、没後出版された18篇と未発表の14篇を含めて178篇の

短篇小説を書いた。ヘミングウェイはフィッツジェラルドのおよそ2倍の期間に及ぶ40年間の作家活動の中でも109篇しか短篇を書かなかった<sup>12)</sup>。ヘミングウェイが7冊の長編をだしていることを考慮してもやはり、フィッツジェラルドは短篇小説家としては稀に見る多産な作家だったと言える。

フィッツジェラルドが自ら望んでいたにもかかわらず、長編の執筆に専念できずに、これほど多い数の短篇を書かなくてはならなかった理由として、マシュー・J・ブルックリは、フィッツジェラルドが1920年から25年に出した3冊の長編が、いずれもベストセラーになれなかったことを第一に挙げている。その間の3長編による印税は合計で三万七千ドル、年平均五千三百ドルだった。ヘミングウェイの『武器よさらば』がその一冊だけで一年間に約三万ドルの収入をもたらしたとと比較すれば、フィッツジェラルドの長編がいずれもいかに売れゆきが悪かったか明らかである<sup>13)</sup>。その上に、フィッツジェラルドは特殊な様々な経済的問題をかかえていた。浪費家の妻ゼルダとの放埒な結婚生活に必要な維持費、1930年4月に精神病を発病して以来のゼルダの長期にわたる入院治療費、一人娘スコッテリーの教育費、嵩む一方の莫大な借金の返済金、これらを捻出するためには、てっとり早く収入を得られる短篇を書かざるを得なかったのである。特に前にも述べた通り、1926年以降はフィッツジェラルドの財政状態は年々逼迫し、1929年には、総所得約三万二千四百ドルのうちの大半、二万七千ドルが短篇からの収入だった。このように必要にせまられてやむなく書いた短篇の中には駄作も多く、170余の短篇作品群の中で、真に文学的価値があるとされるものは、アーサー・マイズナーが指摘している通り、わずか20数篇に過ぎないというのが定説となっている<sup>14)</sup>。ヘミングウェイが次々とベストセラー小説を生み出すことを喜ぶ一方で、自己の才能を発揮できないふがいなさを感じながら、生活のために大衆雑誌に短篇を書きまくっているフィッツジェラルドの哀れな姿が浮かんでくる。

## 6 「夜はやさし」

フィッツジェラルドは1925年の夏、リヴィエラで『夜はやさし』の前身となる小説を書き始めた。その後、1929年と1932年に最初の構想を大幅に変更し、1934年1月から4月まで4回にわたって『スクリブナーズ・マガジン』誌に『夜はやさし』と題して連載され、1934年4月には単行本となって出版された。1926年4月にパリからリヴィエラのフィッツジェラルドに出した手紙の中で、ヘミングウェイは『夜はやさし』の原稿に最初はある、後に削除されることになる「母親殺し」について揶揄している。このことから、フィッツジェラルドが執筆中の『夜はやさし』の構想や題材に関してヘミングウェイに話していたことは確かである。

1934年5月28日にヘミングウェイがキーウエストからフィッツジェラルドに書いた手紙は、出版された『夜はやさし』に対する厳しい批判だった。何よりもヘミングウェイが激しく非難したのは、フィッツジェラルドの親友のジェラルドとマーフィ夫妻を、作中のディックとニコル・ダイヴァー夫妻のモデルとしているのに、マーフィ夫妻とフィッツジェラルド夫妻とを混同していて、その結果、現実にはあり得ないような行動と性格のディック夫妻を創り上げてしまったことだった。『夜はやさし』はにせものである、と決めつけて糾弾したのだった<sup>15)</sup>。かつてフィッツジェラルドがヘミングウェイの長編に対

して書いた批評は極めて長文であり、ある意味で愛情がこもっていたと言える。タイプで3頁のヘミングウェイのこの手紙の中で、『夜はやさし』に直接言及して以上のように批判を述べた部分は、たった一パラグラフだけであった。フィッツジェラルドには、そこに書かれたヘミングウェイの意見はとうてい受け入れられなかった。フィッツジェラルドは、6月1日付のタイプで6頁に及ぶ返信に自分の考えを冷静に詳細につぎのように述べて反論した。

作家が複合的な作中人物を創造することは技法上許され、これまでに幾人もの大作家たちが用いてきた技法であり、また複合的な性格描写が作品の価値を損なうことはない。さらに、ジェラルドとセアラ・マーフィとフィッツジェラルドとの人間関係をヘミングウェイは正しく把握していないから、ヘミングウェイの『夜はやさし』への非難は全く見当違いだと断言した。そして、『夜はやさし』の結末部分は、以前にヘミングウェイと『武器よさらば』の結末の書き方について議論し合った時に、二人が得た結論に従って書かれていることを、この長文の手紙の中でフィッツジェラルドは認めた。この長編の終り方は「通減降下 (dying fall)」と呼ばれ、感情が最も高まった状態で小説を終らせるべきでなく、感情の高揚を弱めるか、その状態から脱け出したところで終わるべきとする技法である。フィッツジェラルドは、H.L.メンケン(1880-1956)への手紙の中で「『夜はやさし』の通減降下の結末は、けっして活力が減少したためではなく、アーネストと私が考え出したものです。これは私の人生で最大の信条となっているものです。」と述べている<sup>16)</sup>。

## 7 親交

このようにして、フィッツジェラルドとヘミングウェイが互いに作品にどのような影響を与え合ってきたかを辿っていくと、その文学上の関係を生み出した二人の友情関係の推移も自ら明らかになる。1926年11月24日付フィッツジェラルド宛のヘミングウェイの手紙には、深い感謝の気持ちから、『日はまた昇る』第8版以降には、次のような副題をつけるようにスクリブナーズ社に頼んであと、茶目っ気たっぷりに書かれていた。「日はまた昇る(もし君についているのなら君の男根のごとく)——より偉大なギャツビー(ジャズ・エイジの予言者F.スコット・フィッツジェラルドとの友情のもとに著す)」さらに続けて、ヨーロッパの内外で会いたいと思うのはフィッツジェラルドだけだと述べ、食べるにもことかく貧しい暮らしぶりを伝えてきた<sup>17)</sup>。その手紙に対し、フィッツジェラルドは、仕事上でも金銭上でも、いかなることでも助けが必要なら自分を頼ってほしいと返事を書いている<sup>18)</sup>。

『日はまた昇る』発売前後のヘミングウェイとフィッツジェラルドの手紙のやりとりは、概ねこのような調子でなされ、「君がいなくさびしい」「君と会いたい、話をしたい」「もっと手紙を書いてくれ」「君こそ一番の友達だ」と互いにまるで恋人の同志のような言葉を繰り返している<sup>19)</sup>。二人の交際の初期には、フィッツジェラルドはヘミングウェイのいくつかの作品の出版社への売り込みを申し出、先輩作家として出版社との対応の仕方を助言した。その上、ハドリーとの別居・離婚問題に悩んでいたヘミングウェイを慰め、当時財政的に困窮していたヘミングウェイに幾度も金銭的援助も申し出ている。実際に、1927年4月18日付の手紙には100ドルの小切手を同封したし、1928年12月にヘミングウェイの父親がピストル自殺を遂げたときにも旅行中のヘミングウェイが電報で依頼してき

たのに応じて100ドルを届けている<sup>20)</sup>。様々な面で援助を惜しまないフィッツジェラルドに宛てたヘミングウェイの手紙に感謝の気持ちが溢れているのは当然であり、二人の手紙のやりとりからも当時のごく親密な関係を容易に読みとることができる。

## 8 友情の破綻

このように親密な二人の関係はいつまでも続いたのだろうか。フィッツジェラルド自身は『ノートブック』に「ぼくは本当にあいつが大好きだった。だが、恋愛とおなじようにやがてその気持ちも当然醒めていった<sup>21)</sup>。」と記している。いくつかの出来事が二人の友情を「醒ました」原因として考えられる。1929年3月、フィッツジェラルドが4度目の渡欧でフランスへ行くことになった時、当時パリに滞在していたヘミングウェイは、酒癖の悪いフィッツジェラルドが自宅に押しかけてくるのを恐れて、フィッツジェラルドに住所を知らせないでほしいと、パーキンズに頼んだのだった。ヘミングウェイが意図的に住所を隠したことを知って、フィッツジェラルドの自尊心が傷つけられたことは言うまでもない。二人の関係を一層危ないものとしたのは、1929年6月のヘミングウェイ対カナダの作家モーリー・キャラハンのボクシング試合だった。第二ラウンドでキャラハンの打撃を顎に受けてヘミングウェイは倒れてしまった。その時、計時係をしていたのがフィッツジェラルドだった。彼は大声で「あ、しまった、うっかりして4分もさせてしまった。」と叫んだ。ノックダウンされるようにフィッツジェラルドがわざとラウンドを長びかせた思い込んだヘミングウェイは、わめき、怒り狂ってフィッツジェラルドを非難した。数分後には、フィッツジェラルドもヘミングウェイも気をとりなおし、ヘミングウェイとキャラハンの試合は続けられた。しかし、試合にみとれてうっかりしたための単純な過ちを、悪意があった行為だと誤解されたフィッツジェラルドは自分に対して謂れのない敵意がヘミングウェイの心奥に存在していることに気付いて、愕然としたのだった。ヘミングウェイとの親交を誇りとし、彼を崇拝さえしているフィッツジェラルドに、ヘミングウェイを故意にひどいめにあわせたりする理由があるはずがない。何よりもその証拠に、もしそうであれば、ラウンドの時間を超過させてしまったことを突然自分から叫んだりしなかったはずである。12月にはボクシング試合でのフィッツジェラルドの過失をすべて不問にしたいと、ヘミングウェイがフィッツジェラルドに手紙を送り、二人の友情はかろうじて保たれることになった<sup>22)</sup>。

表面的には保たれていた友情を決定的に破綻させたのは、1936年『エスクワイア』誌8月号に掲載されたヘミングウェイの短篇「キリマンジャロの雪」の一節で、ヘミングウェイ自身をモデルにした主人公ハリーの回想場面に書かれている次の言葉だった。

…哀れなスコット・フィッツジェラルドを思い出すなあ。あいつときたら、金持ち連中に対してはロマンチックな尊敬の気持ちを持っていた。いつだったか、スコットは「大金持ちは君やぼくとは違う」という書き出しで小説を書いたことがあったっけ。それでだれかがスコットに言ってやったのさ。そうとも、あいつらの方が金をたくさん持っているからな、と。ところがスコットには、そのユーモアが通じなかった。金持ちたちは特別な魅力をもった人種だと思い込んでいた

から、そうじゃないと分かったときには、もうそれだけで、他の場合とは比べものにならないほどガックリきてたな<sup>23)</sup>。

作品に、無断で実名をフルネームで出して、このように友人を誹謗することは、誰からみてもルール違反であり、作家としてのモラルに反すると言えよう。ヘミングウェイの裏切り行為にあい、激しい屈辱と衝撃に打ちのめされたフィッツジェラルドは、短い手紙をヘミングウェイに出した。今後、「キリマンジャロの雪」を単行本にするときには、必ず自分の名前を削除してほしいと頼んだその手紙は、二人の決裂を避けるために感情を抑制した丁寧な文体で書かれていた。そして追伸として「金持ち連中にばくが魅力を感じたことなど、ただの一度もないぞ」と書かれた言葉には、フィッツジェラルドの無念の気持が溢れている<sup>24)</sup>。その後の版では、「スコット・フィッツジェラルド」は現行本で私達が読むことができるように、「ジュリアン」と改められた。しかし、二人の友情はもはや修復不可能なほどに破綻していた。

フィッツジェラルドの『出納簿』には、1925年から37年にかけてフィッツジェラルドとヘミングウェイが会った記録が年代順に一覧表になって記されている。その一覧表の最後に、1929年以降の「11年間(1929-1940)に4回。26年以降は真の友人同志にあらず。(Not really friends since '26)」と書かれている<sup>25)</sup>。本論では、二人の友情の破綻を招いた出来事が1929年3月以来いくつか起きたことをすでに見てきたが、このように『出納簿』によれば、実際にはそれよりも数年早い段階で、親友同志であるように見えた二人の関係も、すでに冷めていたとフィッツジェラルド自身は悟っていたことが明らかである。

## 9 「誰がために鐘は鳴る」

1940年10月にヘミングウェイは『誰がために鐘は鳴る』を出版し、最初の一年間で27万部を売りつくす大成功を収め、「スコットへ 友情と尊敬をこめて アーネスト」と書き添えて、この長編をフィッツジェラルドに贈った。この献本に対して、フィッツジェラルドは11月8日付の手紙につぎのように書いている。

すばらしい小説だ。他の誰にもこんなふうには書けないね…大虐殺の描写がすごくよかった。山頂の戦闘も、爆破シーンも実にみごとだ。本筋以外の場面ではカルコフの挿話とピラーの死へのソナタが特に気に入った…<sup>26)</sup>

心臓発作で急死する一か月半前に、ヘミングウェイの作品を激賞して書いたこの手紙が、ヘミングウェイに宛ててフィッツジェラルドが書いた最後の手紙となった。しかし私達はこの手紙の言葉を文面通りに信じるわけにはいかない。献本を読んだ感想を、精神分裂症でハイランド・サニタリウムに入院中の妻のゼルダには、10月26日付の手紙でこう伝えている。「『武器よさらば』ほどの出来ではないな。それほど緊迫感も新鮮さもなければ、一瞬の詩的ひらめきもない。」 また

『ノートブック』の中でも、「誰がために鐘は鳴る」は『レベッカ』の深遠さがあるにもかかわらず、全く軽薄な作品になってしまっている」とひどくけなしている<sup>27)</sup>。『誰がために鐘は鳴る』の出版に際しては、本稿の4にあるような『日はまた昇る』や『武器よさらば』の場合とは異なって、フィッツジェラルドが長文をしたため、感想や助言や批判を延々と率直にヘミングウェイに伝えることはもはやなかった。また作品の創作方法をめぐって議論をすることもなかった。フィッツジェラルドがヘミングウェイに最後に出した偽りの賞賛の手紙こそ、長く続いたフィッツジェラルドとヘミングウェイの友情が、すでに再びもとに戻るのが不可能なほどに冷めきっていたことを物語っている。

## 10 断ち切れない絆

身長6フィート5インチ、釣りや狩猟が得意で見るからにたくましいスポーツマンタイプのヘミングウェイと、フットボール選手になりたかったのに小柄なために果たせなかった5フィート8インチの繊細で華奢な体つきのフィッツジェラルド、4度結婚し、3度離婚したヘミングウェイと、精神を病んだ妻一人との婚姻を継続したフィッツジェラルド、人間としても、また後述する通り、作家としても殆ど共通点がなく、対照的とも言える二人が共に抱いていたのは強い文学的野心だった。同時代に人気作家になった同世代の二人の間に、ライバル意識が存在して当然である。そしておそらくは、二人の性格的な相違と、また一つには、フィッツジェラルドが作家ヘミングウェイを世に送り出した生みの親であるという立場上の違いから、相手に対してより強いライバル意識を公然と露にしたのは、後にフィッツジェラルドとは比較にならないほどの高い文学的名声と莫大な富を獲得したヘミングウェイの方だった。

1925年8月号の『ダイアル』誌の中で、ジャーナリストのギルバート・セルデスがフィッツジェラルドを作家として極めて高く位置づけ、『偉大なギャッツビー』に対する賛辞を載せた。この時、ヘミングウェイはセルデスの評論をけなすことによって、フィッツジェラルドの作品の評価を落とそうとした<sup>28)</sup>。面前で、フィッツジェラルドをほめそやす者がいると、ヘミングウェイは露骨に不機嫌になることもしばしばであった<sup>29)</sup>。また、ヘミングウェイが『シカゴ・トリビューン』の記者にプリンストン大学卒だと学歴を偽ったのも、自分が高卒であるのに、フィッツジェラルドがプリンストン大学に在籍したことがあるのを羨んだからだった。『キリマンジャロの雪』の中で、実名を出してフィッツジェラルドを中傷したのも、ヘミングウェイのフィッツジェラルドに対するこのような対抗心や嫉みが一因となっていたと考えられるのではないだろうか。一方フィッツジェラルドは、公的な場では必ずヘミングウェイを賞賛し、ヘミングウェイの不利になるようなことは一切言ったり書いたりしたことはなく、常にヘミングウェイの賞賛者・庇護者であり続けた。

一時期は極めて親しい友人関係にあったのに、度重なる諍いの後に結局はヘミングウェイが絶交してしまった文学者の名を、マッシュュー・J・ブルックリは11名も挙げている。シャーウッド・アンダソン、ガートルード・スタイン、ジョン・ドス・パソス、ロバート・マコーン、フォード・マドックス・フォード、モーリー・キャラハンらがそうである。ヘミングウェイは自分の修業時代に必要としていた精神的、金銭的援助や助言を与えてくれた作家たちと、ある時期は親しく交際しても、最後には絶縁すると

いうことを繰り返したわけである。これまでに検討してきたように、幾度か友情が危うくなりかけたことはあっても、15年間もの長期間の友情をヘミングウェイとの間で継続したのは、フィッツジェラルドだけであった<sup>30)</sup>。何故、ヘミングウェイは、他の多くの作家たちとは違って、フィッツジェラルドとの個人的な繋がりを断たなかったのだろうか。「26年以降は真の友人同志にあらず」と自ら書き、ヘミングウェイから、再三、屈辱的な目にあわされても、フィッツジェラルドは何故ヘミングウェイとの決定的な別れを避けたのだろうか。1936年9月、服毒自殺を図って未遂となったときでさえも、フィッツジェラルドが助けを求めて電報を打った相手は、ヘミングウェイだった。ヘミングウェイからの返電には、「どんな時でも喜んで君の助けになりたい」と書かれていた。フィッツジェラルドも、ヘミングウェイも互いの特別な友情がどうしても必要だったのである。

## 11 おわりに

フィッツジェラルドとヘミングウェイは15年間の友情関係の中で、どの程度互いの作品に影響を及ぼし合ってきたのだろうか。マシュー・J・ブルックリは二人が創作活動中にそれぞれの作品との関連でどのような関わりを持ったか、年代順に詳細に辿った。その後で、この二人の作家は互いに文学上影響を及ぼし合うことは殆ど全くなかったと、結論を下している。その理由として、1925年に会会う以前に、それぞれがすでに独自の文体を確立していたことを挙げている<sup>31)</sup>。フィッツジェラルドの文体は感情を情緒的に表現し、音声、リズムの変化に富む美文調である。一方、ヘミングウェイが確立したハード・ボイルド・スタイルは、修飾語の使用を極力控え、複文を避け、単文あるいは会話文の羅列からなる叙情を排した文体であることは、よく知られている。

さらにまた、文体だけでなく、作品の主題、題材、技法に於いても、長編の結末部の「通減降下」以外には、二人の間には何ら、影響も共通点も見い出せないのである。フィッツジェラルドは、アメリカの外面的には華やかな上流社会の道徳的・金銭的腐敗を若い男女の恋愛を通して好んで描き、ヘミングウェイは、生と死、暴力、逃避などを主題としてしばしばとりあげ、よく戦場を舞台とした。『日はまた昇る』でも『武器よさらば』でも、ヘミングウェイはフィッツジェラルドの助言に従って原稿の削除をしたが、『日はまた昇る』のジェイクの性的不能に関わる感情描写についてのフィッツジェラルドの意見はとり入れられず、『武器よさらば』でも、フィッツジェラルドが反対した、未婚の母になる道を選んだ健気な女性という従来の小説で書き古された女主人公の設定もそのままだった。

ヘミングウェイがフィッツジェラルドに与えた助言もたいして役立ったとは思えない。ヘミングウェイは、繰り返し長編の執筆を勧めたが、それはフィッツジェラルド自身が誰から言われなくとも望んでいてかなわないことだった。現に、ヘミングウェイと知り合ってから、フィッツジェラルドはますます長編が書けなくなる一方だった。フィッツジェラルドの『夜はやさし』に関して、ヘミングウェイは、主人公となる人物とモデルとなった人物、作者夫妻との混同を非難したが、その非難はどういってフィッツジェラルドが納得できるものではなかった。

フィッツジェラルドが1936年にジョン・オハラに書いた手紙は、フィッツジェラルドとヘミングウェイの以上に述べた関係をよく言い表している。この手紙は、ヘミングウェイの短篇「五万ドル」(『ア

トランティック・マンズリー』誌 1927年7月号)の原稿にあった冒頭の数節を、フィッツジェラルドがヘミングウェイを説得して削除させたことに言及している。この手紙に述べられていることは、二人の他の作品にもあてはまり、先のブルックリの意見が正しいことを、フィッツジェラルドが自ら裏づけたものと言える。そこには、二人の文学上の関係について、次のように断定して書かれていた。

アーネストと僕は、互いに助言を与えたり与えられたりしたんだけど、一つしてお互いに聞き入れたことなんかなかったのさ。僕がアーネストに与えた影響といったら、たった一つだけ。ここから前の部分は全部カットしよう、と言ってやったこと、それだけだったね<sup>32)</sup>。

## 注

- 1) 高橋正雄『失われた世代の作家たち 二十世紀アメリカ小説Ⅱ』(富山房、1974年)、PP.13 - 19.
- 2) Ernest Hemingway, *A Movable Feast*, (Charles Scribner's Sons, 1964) PP. 25 - 31.
- 3) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, ed. Andrew Turnbull (Charles Scribner's Sons, 1963), P.167.
- 4) Matthew J. Bruccoli, *Scott and Ernest The Authority of Failure and the Authority of Success*, (Random House, 1978), P.35.
- 5) Robert Lee, *Scott Fitzgerald: The Promises of Life*, (Vision Press, 1987), P.9.
- 6) *Scott and Ernest*, P.43.
- 7) *Ibid.*, PP.44 - 48.
- 8) *Ibid.*, PP.80 - 83.
- 9) *Ernest Hemingway Selected Letters 1917-1961*, ed. Carlos Baker (Charles Scribner's Sons, 1981), P.200.
- 10) *Ibid.*, P.340.
- 11) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, P.355.
- 12) Jackson R. Bryer, "Introduction", in *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*, ed. Jackson R. Bryer (The University of Wisconsin Press, 1982), XI.
- 13) *Scott and Ernest*, P.98.
- 14) Arthur Mizener, "Introduction", *The Far Side of Paradise* (Houghton Mifflin, 1949), XXVIII.
- 15) *Ernest Hemingway Selected Letters*, P.407.  
1939年3月25日付マックスウェル・パーキンズ宛の手紙、1951年4月及び7月のマルカム・カウリー宛の手紙などではヘミングウェイは『夜はやさし』を絶賛していることから、再読するうちにこの作品に対するヘミングウェイ評価が変わったと考えられる。
- 16) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, P.510.
- 17) *Ernest Hemingway Selected Letters*, P.231.
- 18) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, P.298.

- 19) Ibid., PP.296f, P.301.  
*Ernest Hemingway Selected Letters*, P.203, P.250.
- 20) *Scott and Ernest*, P.70.
- 21) Ibid., P.102.
- 22) *Scott and Ernest*, PP.88-93.
- 23) Andrew Turnbull, *Scott Fitzgerald*, (The Bodley Head, 1962) P.248.
- 24) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, P.311.
- 25) *Scott and Ernest*, PP.145f.
- 26) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, P.312.
- 27) *Scott and Ernest*, P.145.
- 28) Ibid., P.19.
- 29) Ibid., P.132.
- 30) Ibid., P.19.
- 31) Ibid., P.122.
- 32) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, P.538.